



不可能を可能にする、 ものづくりの真髄。

「ななつ星」の車体に輝く北九州人の仕事

文：重岡 美千代

株式会社 鋳絵 (つちえ)
北九州市小倉北区東港1丁目1-21
Tel.093-561-2511 Fax.093-561-5099
<http://www.tsuchie.jp>

2013年10月の運行以来、絶大な人気を誇るクルーズトレイン「ななつ星in九州」。九州の魅力の世界中に向けて発信し、見送る沿線コミュニティの老若男女には夢と活力を与え、人と人、心と心をつないで走る、まさに乗り物の範疇を超えた奇跡と感動のステージである。その美しい車体に輝く真鍮のエンブレムが、実はメイドイン北九州なのをご存知だろうか？

複雑な造形を描くフロントグリルの意匠、切り文字サインや一部内装の製作を手がけたのは、株式会社・鋳絵(藤波耕司社長)。鉄道デザインのカリスマ・水戸岡鋭治氏も全幅の信頼を寄せるものづくりのスペシャリストだ。「相談されたものは何でもつく。出来ないとは言わない」というポリシーのもと、個人宅の表札から公共の大きなモニュメントまで、都市と人々に関わるさまざまなアートデザインを世に送り出している。扱う素材は金属、石、木、ガラスなどあらゆるジャンル。代表作の一つには沖縄平和祈念公園モニュメントがある。市内では小倉城庭園や勝山公園の園名サインなど、街を歩けば鋳絵

作品に当たるほど。実は北九州芸術劇場にも中劇場の2階客席最前列に設置された電動転落防護柵はか多くの仕事に光る。

「根っからつくるのが好きなんです。打ち合わせをして、デザインを起こして設計して、手作業で。ゼロからつくり上げて、設置までやるのが鋳絵の仕事。今のオートメーション化された経済社会とは相反するかもしれませんが、機械や数字では測れないモノがつくれるから」と藤波耕司社長。その根底には幼い頃、消防士だった父親が3年かけて自宅を建てるのを見よう見まねで手伝った経験が流れている。「父は屋根も自分で葺くし、ブロックも買わずに型から作った。ものづくり、本来の醍醐味がそこにあったと思う」と藤波さん。高校卒業後は、東京の阿佐ヶ谷美術専門学校へ。当時新進気鋭の金属造形作家集団・工房ジリオに出会い、深い感銘と影響を受けた。その勢いのまま、1976年、25歳の時に帰郷して「クラフト鋳絵」を設立。ところが、東京のような需要は北九州では見込めない時代。鳴かず飛ばずのジレンマが続いたが、藤波さんは

ものづくりの手を止めることなく動かし続けた。

利益や効率よりも、愛すべき手仕事を貫く。一見不器用にも思える藤波さんのやり方は、ゆっくりと確実に周りを動かし始めた。何しろ「こういうのが出来ないか？」と相談すれば、要望した以上のクオリティとオリジナリティを持つ提案が返ってくるのだ。藤波さんは、「常によりよいものをつくらうとするのは、ものづくりの職人として当たり前のこと。どれだけ誠実に、クライアントやそれを見る人のために、喜ばれるようにつくるかが大事」と心がけた。「つくっている時には最高のものを目指して突き進むんですが、つくり終えれば過去のモノ。だからすべてにおいて満足したことは、一度もないんです。でも、それが次へのエネルギーになる。最初は地元の仕事だけだった工房が、今では日本中、時には海外にも行くようになった。もともと、自分たちはどこまで行けるんだろうと、うちのスタッフは夢を持ち、仕事を楽しんでいると思います」。そんな姿勢がまた新しい仕事を生む—不可能を可能にする仕事師集団の挑戦には、終わりが無い。